

線路脇の家

生まれ育った家は私鉄の線路沿いに建っていた。私の部屋からは、細い道を隔てた線路を通っていく電車のひなびた背中が見えた。

福井駅が始発で、一本は東尋坊の海へ向かい、もう一本は永平寺や勝山へ向かう、どちらにしてものどかな線だ。三十分毎に一本、それも朝と晩の通勤通学時間帯に二両編成になる以外は一両だけでゴトゴト走ってゆく。線路脇には菜の花が植えられ、またあるところは耕されて畑になったり、犬たちの散歩道となった。やがて港に出るか、山に着くか。それまでの景色の和やかさはちよつと他では味わったことがない。

小学校の遠足では、よくこの旧京福電鉄（現在はえちぜん鉄道）を使った。最寄りの西別院という駅まで列を組んで歩く。無人駅である。ここから電車に乗って遠足に出発するのだ。何日も前から楽しみにしていた行程なのに、私の足はほ



イラスト・岡林玲生

んの少し重い。今でもオレンジ色の体操服を着た小学生たちがリュックを担いで西別院駅の前の小さな公園に整列しているようすが目に浮かぶ。幼かった自分の気持ちも手に取るように思い出すことができる。これから遠足だ、と浮かれています。でも、胸の奥には小さな不安が蠢いてもいる。

西別院から海の方へ向かうときは通らないが、山の方へ向かうと見ええてくる。線路際に建つ、赤い瓦の家。カーブで速度を落としたその先にわが家が現れるのはわかっている。

電車は駅を出てすぐに通りを横切る。胸がどきどきしはじめる。どうしよう、

と思う。小さな踏切を過ぎ、カーブに差しかかる。と、カーブの内側に見慣れた景色が広がる。見ないでおこうと思っっているのに、やっぱり見てしまおう。うらだ！私の家だ！そのとたん、猛烈なホームシックに襲われるのだ。遠足なんかもういい、このままここで降りてほしい。今朝出てきたばかりの家に帰りたくてたまらなくなってしまう。いつもの光景なのに、どうして電車の中から眺めるわが家は特別な顔をしているんだらう。

当時、友達遊びに来ると、皆ときどきハツとするようだった。遊びの手を止めて、顔を上げた。

「今の、何？ 地震？」
ああ、と私は答える。

「地震じゃないよ、電車だよ」

電車を通るたびに家が揺れていたらしい。気づかなかつた。電車のリズムが身体に刻まれていたのだから。結婚前に初めて家に挨拶に来て泊まっていた夫も、電車の音と揺れが気になったと漏らしていた。私は気にならなかった。実家を出て久しいのに、私の身体には慣れ親しんだリズムがすっかりと記憶されていた。

今年になって引越した。実家の隣だ。線路際に戻ってきてしまった。うちの子どもたちも遠足のたびにホームシックにかかるだろうか。将来、結婚相手を連れてきたとき、地震かと思ったとこっそり耳打ちされたりするのだろうか。

文・宮下奈都
Natsu MIYASHITA

1967年福井県生まれ。2004年文壇新人賞佳作に入選してデビュー。著書に『スコレNo.4』『遠くの声に耳を澄ませて』がある。